

「かのや風土記」について



現在、市では「かのや風土記」の編さんを進めています。もともと風土記とは、奈良時代に地方の文化や地勢などを国ごとに記録・編さんしたものを指します。これに倣い、各自自治体においても風土記の名を冠した地誌が発行されています。鹿屋市にも合併前の市史や町史、郷土史などが存在しますが、それぞれの項目に関して詳細な解説や歴史背景などが記されており、そのためにページ数や文字が多くなりがちで、読むのに敷居が高い印象を受けています。

そこで今回は、図や写真を多く用いて読みやすい・分かりやすい。鹿屋市の今が分かる風土記になるよう努めています。また、中高校生に読んでもらえるように鹿屋市民として知っておいてほしい大事な歴史や文化、人物などを中心に各テーマをまとめ「これがあれば鹿屋を学べる・語れる」1冊を目指しています。

各ページの両側には、テーマに



かのや風土記アドバイザー
 どうごめ ひとたか
堂込 秀人 さん
 新川町在住
 上野原縄文の森（霧島市）園長
 鹿児島県考古学会会長

岡市生涯学習課
 ☎0994-31-1138

関連したトピックを掲載。トピックは本文の内容を掘り下げたり補ったりしており、さらに興味を持ってもらった場合には市史や町史などに目を向けてもらえれば、新たな発見があると思います。そういった意味では、本風土記は郷土に興味を持ってもらう入り口の役割を担っています。

国際化の現代、例えば留学時に自己紹介をした際に、個性や特技のことはもちろんですが、日本や郷土のことをよく聞かれると思います。日本に興味を持っている外国人は多く、固有の伝統や風景を知りたがることから、ふるさとのことを知ることが大きな価値になります。ぜひ自



分の生まれ育ったまちの先人や伝統、風土のすばらしさに触れてほしいと思います。

本風土記は市内の各学校や図書館、公共施設などに設置される予定です。この「かのや風土記」を手にとっていただき「ふるさとかのや」について知ってもらうきっかけとなれば幸いです。

難読地名への答え

- ①生栗須「いくるす」
市内には「生栗集」「池栗須」といった地名もあります。
- ②白寒水「しらそうず」
「寒水」（串良地区・吾平地区）は「かんすい」と読みます。
- ③上別府「うえんびゅう」
「かみべつぷ」ではありません。
- ④辰喰「たつばん・たつばみ」
輝北では「たつばん」、串良では「たつばみ」と読みます。
- ⑤愛宕「あたご」
愛宕とは京都の愛宕神社から発祥した防火の神に対する信仰を意味しています。
- ⑥名主「みょうず」
一般的には「なぬし」と読み、村や集団の代表者のことを言いました。同じ読みで「名頭」というものや、輝北に「名主段」という地名も。

※地名や方言の語源などについては、諸説ある中から有力とされているものを取り上げました。

鹿児島方言かるた

鹿児島方言をいくつかピックアップ。語源や由来を調べるのも方言の楽しみ方の一つです。

あーある
 黒板消し。オランダ語の「rafee（擦る）」から来ているとの説が有力。

がね
 カニ。又は、揚げた姿がカニに見えることから、さつまいもの天ぷらのこと。

あながあつ
 めちゃくちゃ。「ちん」という強調の接頭語に「がらつ」という擬音がついたもの。

ぶえん
 新鮮な魚。塩漬けにしないでも食べられたことから「無塩」が転訛したもの。

てげ
 適当。語源は「大概」からきており、重ねて「てげてげ」とも言われる。宮崎では「とても」という意味で使われる。

ぎった
 ゴム。マレー語やオランダ語が語源という説がある。ゴムまりは「ぎったまご」。

かかぢる
 掻くこと。「掻く」に強調の接尾語「じい」がついたもの。

あえすと
 頑張れ、それいけといった意味の掛け声。江戸時代末期頃から鹿児島で流行るようになった。

さかごじゅうご
 しばらくしてから。五穀豊穡のお供え物を3種類5個ずつ準備する時間から。

だつまご
 落花生（ピーナッツ）。「らつかせい」→「だつくあしよう」→「だつきしよ」と訛った。

くろぢよか
 焼酎を温めるときに使う陶磁器の土瓶。「黒千代香」と書く。用途によって「薬ぢよか」「茶ぢよか」もあった。

だいやめ
 晩酌。疲れをとるという意味で、鹿児島弁の「だれる（疲れる）」+止めるが語源。